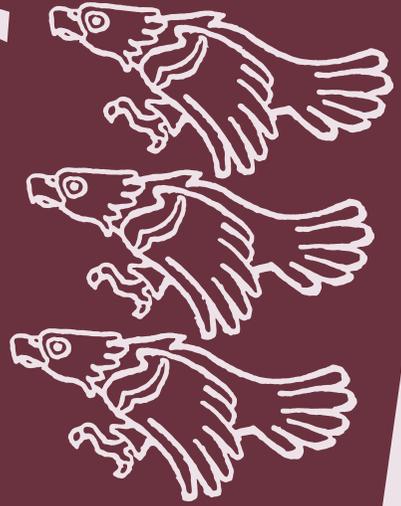


ホ ト ク ス イ



6月から始まった新企画展示「アーヤと魔女展」。子どもたちに人気なのは、指で操作して顔の表情を作るタッチパネルの展示です。笑顔、怒った顔、悪だくみをする顔、へん顔など、アーヤの顔を自分の好きなように作ることができます。キャラクターの表情は、誰が動かしても同じにはなりません。操作する自分自身に似てくるとか。壁に取り付けられた鏡で、自分の顔もチェックできるので、ぜひ、モニターと見比べてみてください。普段見慣れている鏡、そして自分の顔。表情ひとつひとつをこんなにじっくり見ることは初めてかもしれません。

図書室では『ジブリの食卓 アーヤと魔女』（主婦の友社）が人気です。ミミズのプレッツェル、カップケーキにシェパーズパイ。「夏休みに料理に挑戦する！」と本を手に張り切っているのは女の子だけではありませんでした。8月に公開される映画や展示に本、そして家での料理まで、「アーヤと魔女」をいろいろな形で楽しんでもらえたらと思います。

季刊トライホークス 2021年 | 64号

発行日……2021年8月28日 | 発行人……中島清文

発行所……徳間記念アニメーション文化財団

東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館

編集……石光紀子 蛭名さえ子 | デザイン……川島弘世

印刷……図書印刷株式会社 | 非売品

本棚より

トライホークスに置かれているおすすめの本を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にさせていただいたら嬉しいです。

忘れ去られた偉業

長編アニメーション「紅の豚」に登場する、ボルコの戦友フェラーリン。彼の名前は、今から100年前にローマ・東京間を飛行機で飛ぶという壮大な計画に挑み、見事成し遂げたイタリア空軍航空隊のパイロット、アルトゥーロ・フェラリンから名づけられました。フェラリンは、1920年2月14日、使い古されたS.V.A.に乗ってローマを出発し、1万7,920キロを30の経由地を経て飛び、109日間かけて東京に到着しました。機関士と2人、木製の機体に布張りの翼、無線も無ければ、当然レーダーも無い、過酷な気象条件にさらされながらの飛行は、時に不時着した場所で先住民に捕らえられ、猛獣が生息するジャングルを飛び越え、まさに命をかけた冒険だったのです。

この本はフェラリン自身が1929年に書いた『Voli per il Mondo』（『世界への旅』）の中から、ローマ東京間について書かれた第3章から第10章の全訳です。最終目的地の東京では、到着予定日を休日にして多くの人が飛行機を見られるようにしていたとか。モノクロではありますが写真も多く掲載されており、出迎えた人々の熱狂ぶりがどれほどだったかが伝わってきます。飛行機を一度も見たことが無い人も多い時代、100年前の世界は見るだけでも面白く、新鮮です。

また、現在美術館2階ギャラリーでは、アンサルドS.V.A.9機の实物大平面模型を展示しています（2022年5月まで展示予定）。これは、フェラリンの偉業100周年を記念してイタリア大使館で展示され、その後当美術館に寄贈されたものです。こちらもぜひご覧いただきたいと思います。



忘れ去られた偉業

アルトゥーロ・フェラリンの
1920年ローマ東京間飛行

著者…

アルトゥーロ・フェラリン

訳者…井倉まき

カルロ・フェラリン協力

*この本はAmazonにて

販売しています。

オンデマンド(ペーパーバック)

1,935円



こみや ゆう

Yu Komiya

夢中になって読んだ本

今回、本を紹介していただいたのは、翻訳家の小宮由さんです。選ばれたのは「ドリトル先生」をはじめ、図書室でもおなじみの本。同じ本が選ばれて嬉しいと共に、この先もずっと読み継がれていくこれらの本を、図書室でもしっかり紹介したいと改めて思いました。

* * * * *

「夢中になって読んだ本なんて、あり過ぎて何を選んだらいいだろう？」この原稿の依頼を引き受けた時に、私の頭をよぎった言葉だ。

私の両親は、私が小学校へ上がる時に、東京で脱サラをし、熊本で「子どもの本の店 竹とんぼ」を開業した。今も両親は健在で、兄夫婦と共に店を切り盛りし、今年でちょうど40年になる。そんな私にとって、家にたくさんの絵本や児童書があることは、日常だった（それもいま思えば、選び抜かれた良質の本ばかり）。もちろん、子どもの本だけ売っている書店の経営は楽ではなく、当初は税理士に「家族5人分の川で首を吊れる縄を用意しておいて下さい」と言われるくらい、毎年、切迫していたらしいが（生前の石井桃子先生からも「お金を貸しましょうか」と心配されたほどだ）私は、そんなことなど露知らず、のびのびとした子ども時代を過ごしていた。

ただ、家業がそのような店だからと言って、子どものころの私が、筋金入りの読書家だったわけではない。『クマのプーさん』『大どろぼうホッツェンプロッツ』『はてしない物語』『二年間の休暇』など、児童文学をそれなりに楽しんではいたものの、一番、読書にのめり込んだのは、大学時代だった。

大学時代は、とにかく読んだ。専攻の学問やサークル活動はそっちのけ、友だちを作ることもできず、読書に明け暮れる毎日だった。私の祖父は、トルストイ文学の翻訳家であり、良心的兵役拒否

者の北御門二郎なのだが、祖父の訳したトルストイ文学に導かれ、ドストエフスキーやゴーゴリといったロシア文学から、論語、聖書、ソクラテスなども読み漁り、とうとう読むものがなくなって、店に並んでいる絵本や児童文学に戻ってきた。そして、店の棚に並んでいる商品を、左から右へ片っ端から読んでいった。

そして、気がついた。なぜ両親が、子どもの本の専門店という決して儲からない商売をわざわざやっているのか、ということ。竹とんぼに並んでいる絵本や児童書には、トルストイが晩年ずっと追いかけていたテーマ「人間にとって幸せとは何か？」という問いへの答えが、その根底に描かれていたのだ。「そうか、トルストイも、ここに並んでいる本の作家たちも、読者対象はちがえど、同じことを表現しようとしていたのか。そして、両親は、その想いを、ひとりでも多くのお客に届けたくて、この店をやっているのか!」と。

大学を卒業してから今に至る私の歩みは、ただ長くなるだけの話なので、割愛させていただくが、その大学時代に、私が一番夢中になって読んだ本をひとつ挙げるならば、それはドリトル先生だ。最近、小学3年生の次男に、2年生の頃から約1年かけて、全12巻すべて読んで聞かせた。息子に読み聞かせている間、大学時代に読んだときの記憶が随所で蘇ってきたが、一方で、学生の頃には味わえなかった新たな感覚もあった。それは、次

男の心にドリトル先生とその家族を宿らせることができた、という至福感だ。

いま、次男の心には、正義感があって、行動力があり、楽観主義で、常に動物などの弱い立場の側に立ち、情にもろく、戦争などの争いを憎み、必要以上のお金は悪とし、有名になって目立つことを嫌い、ただひたすらに自分の興味があることに没頭し、結果、世界中の動物たちから愛され、頼りにされている、そんなドリトル先生が宿っている。機転が利いて、困った仲間を放っておけない犬のジップ。知識豊富で思慮深いオウムのポリネシア。口は汚いが、人情味のあるスズメのチープサイド、何にでも首を突っ込むが、リーダーシップのある白ねずみ。ドリトル一家のムードメーカーのブタのガブガブは、だれもが目に見えるものを生産しなければならないわけではなく、世の中には、いろいろな役割があるのだと教えてくれる。ああ！そして、私の愛する、家政婦のアヒルのダブダブ。ドリトル一家の食事の世話をして、みんなを陰で支えている。いつもダブダブは「先生は、立派なことをされているのですから、もっと見返りをもらって当然です！」と、無欲なドリトル先生に腹を立てているのだが、その実、ダブダブ自身が、一番の無償の奉仕者であり、ただひたすらに、ドリトル先生への愛で動いている。

そんなドリトル一家がすべて、全12巻を聞き終えた次男の心に宿ったのだ。ドリトル一家が、彼の心の中で、ずっと友だちでいてくれる。言い換えれば、彼の心には、多彩な理想の人物像があり、多大な理想の環境像があるということだ。それが、

心にあるということは、物事を多角的、かつ客観的に、そして、ユーモアをもって見られることなのだから、将来、辛いことや苦しいことに直面しても、きっと乗り越えられるはず。ならば、彼にとって、これ以上の財産が他にあるのか！その財産は、決してお金では買えないし、だれかに盗まれるものでもないのだ。

そして、同時に気がついた。息子に読んで聞かせるまで、本の内容をすっかり忘れていた私だったが、やっぱり私の心の中にも、ドリトル先生とその一家が住みつづけていたのだ。そのキャラクターたちの価値観が、いまの私の一部を形成していることは間違いないし、だからこそ、無意識にこの本を息子に読んでやったのだと思う。

「私の子育ては、すでにもう十分ではないか」12巻目の最後のページを読み終え、重いハードカバーの本を閉じたとき、私はそう思った。きっとこの子も、将来、人の親になった時、再びこの本を手になることになるのではなかろうか。

こみやゆう

翻訳家。1974年、東京生まれ。2004年より東京・阿佐ヶ谷で家庭文庫「このあの文庫」を主宰。主な訳書に『さかさ町』（岩波書店）『イワンの馬鹿』（アノニマ・スタジオ）『こころのほんばこ』シリーズ（大日本図書）など多数。祖父は、トルストイ文学の翻訳家で良心的兵役拒否者の北御門二郎。

トライ
ホークス
の本

テディ・ロビンソンの
たんじょう日

作・絵…ジョーン・G・ロビンソン
訳…小宮 由
岩波書店 1,650円



[..... 夢中になって読んだ本]



ドリトル先生
アフリカゆき
作…ヒュー・ロフティング
訳…井伏鱒二
岩波少年文庫 748円
◇ドリトル先生物語 全13冊



指輪物語I
旅の仲間 上
作…J.R.R. トールキン
訳…瀬田貞二・田中明子
評論社 2,420円
◇指輪物語 全7冊



第九軍団のワシ
作…ローズマリ・サトクリフ
訳…猪熊葉子
岩波少年文庫 924円
◇ローマン・ブリテン4部作 全5冊



レ・ミゼラブル 上
作…ヴィクトル・ユゴー
編訳…清水正和
福音館書店 2,750円
◇レ・ミゼラブル 上・下巻

◆ライオンと魔女
作…C.S.ルイス 訳…瀬田貞二
岩波少年文庫 748円
◇ナルニア国ものがたり 全7冊

◆影との戦い ゲド戦記I
作…アーシュラ・K.ル=グウィン
訳…清水真砂子
岩波書店 1,870円
◇ゲド戦記 全6冊

◆モンテ・クリスト伯 上
著者…アレクサンドル・デュマ
編訳…竹村 猛
岩波少年文庫 880円
◇モンテ・クリスト伯 上・中・下巻

ダイアナ・ウィン・ジョーンズ

宮崎駿監督が語る作品の魅力とは

イギリスはファンタジー文学が盛んな国です。ケルト文化とゲルマン文化が混在した島国ゆえ独自の宗教観や文化が形成されたこともあり、妖精や魔法をごく自然に受け入れる国民性が根底にあるようです。

1954年、J.R.R. トールキンが書いた「指輪物語」はファンタジー小説として、高く評価されました。いわゆる子ども向けの読み物ではなく、格調高い文体で書かれた本格的な長編小説として、文学的にも優れた傑作だったからです。このことによりたくさんのファンタジー作家が生まれることになりました。ダイアナ・ウィン・ジョーンズさんも、そのひとりです。1934年にイギリスで生まれ、オックスフォード大学でJ.R.R. トールキンや「ナルニア国物語」を書いたC.S. ルイスから学び、結婚や育児を経て1970年に作家デビューしました。

彼女の作品の特徴は、ファンタジーの王道ではない独特の世界観や個性的なキャラクター、英国人特有のブラックなユーモアであり、読者の想像のひとつ先を行くストーリー展開も魅力です。

特に宮崎駿監督は、彼女の良さに作品に描かれるハチャメチャな母親像を挙げています。例えば、父親の敵討ちを息子に勧め、自分の稼ごどころか息子の稼ぎにも手を付ける母親。「アーヤと魔女」では、躊躇も涙もなく、1枚の手紙だけを添えて赤ん坊を施設に置いていく母親。そこには、母親としてよりも大人の事情を優先する独特の割り切りが感じられます。宮崎監督は、こうした母親像は日本人には書けないのではないかと話していました。「これこそイギリスらしさであり、イギリス人じゃないと書けないし、ダイアナさん自身がその性格だと思うから、あんなに面白く魅力的に描けるのだろう」と。

また、ダイアナさんの作品の特徴として、描写が具象的で、情景がありありと目に浮かんでしまうところもあるでしょう。宮崎監督は「デイルマーク王国史」シリーズ（全4巻 東京創元社）が特に気に入りで、その情景描写の見事さに「彼女の最高傑作。このお話に自分で挿絵をつけて映像化してみたいと思いやってみたが、出来なかった」と感想を語っていました。

『魔法使いハウルと火の悪魔』（徳間書店）を読んだ際は、「19歳の少女が魔法で90歳に変えられてしまう」ということに心を掴まれ、「だけど、夜寝ているときに月の光

を浴びると19歳の少女の姿に戻るというのはどう?」と楽しそうに語っていましたが、これも宮崎監督の頭の中で情景がありありと浮かんで、妄想が膨らんでしまったゆえの発言じゃないかと思います。

ところで、2004年11月、日本で「ハウルの動く城」が公開された頃、宮崎監督や鈴木プロデューサー、宮崎吾朗さん一行が仏・英国へ出張することになりました。パリで宮崎監督関連の展覧会が開催されたのと、その後イギリスに渡り、出来たばかりの「ハウルの動く城」を、原作者であるダイアナさんに見てもらうためです。上映場所は、ダイアナさんの住まいと同じ町にある「ウォレスとグルミット」で有名なアードマン・スタジオの映写室を借りました。

ダイアナさんはインタビューで「素晴らしかった。深みがあって奇妙でアニメーションが美しかった」「他の誰よりも私の本を理解している。同じメッセージを込めていると思う」と話しています。実はダイアナさんは、長年のスタジオジブリ作品のファンだったのでした。

それから15年後、スタジオジブリは再びダイアナさんの作品の映像化に挑むことになりました。徳間書店から届いた児童書『アーヤと魔女』を宮崎監督が気に入り、次回作を探していた宮崎吾朗さんに映画化を強く勧めたことがきっかけです。宮崎監督は、「なんという愛らしい本でしょう。ぼくは5回くらいスミからスミまで読みました」とコメントを寄せています。

主人公のアーヤは、大人の心を巧みに操りながら、自分のやりたいように生きていく逞しい女の子。この強烈なキャラクターが周囲のユニークな大人たちを巻き込んで繰り広げるドタバタは、まさにダイアナさんの面目躍如といえるでしょう。ただ残念なことに今回は、ダイアナさんにこの映画を見てもらうことができません。実は彼女、2011年にこの世を去ってしまったのです。76年の生涯でした。

(スタジオジブリ広報
西岡 純一)



アーヤと魔女

作…
ダイアナ・ウィン・ジョーンズ
訳…田中薫子
絵…佐竹美保
徳間書店 1,870円